様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８７
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2017
課題番号：２５７７０１６０

研究課題名（和文）新しい名前の読みにくさとその社会的負担

研究課題名（英文）On the social burden of new difficult to read names

研究代表者
ウンサーシュッツ　ジャンカーラ（Unser-Schutz, Giancarla）

立正大学・心理学部・准教授

研究者番号：７０６３２５９５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では近年変化の途中にあるといわれている名付けの習慣の傾向とその社会的背景と負担を究明した。全国の名付け傾向の調査で、確かに読みにくいと推測できる名前が各地で増加していることが確認された。だが、名前の特徴を分析した結果、メディアで取り上げられている珍奇な当て字の名前は少なく、大半が既存の読みを工夫していることが分かった。メディアにおける反応や名付けの理由を調査した結果として新しい名前が近年の家族関係や個人性の捉え方の反映として見られることが多いことも明らかになった。すなわち、新しい名前に対する批判は、新しい名前が読みにくいからだけではなく、新しい価値観の象徴となっているからだと解釈できる。

研究成果の概要（英文）：This research project sought to elucidate how naming practices are changing in Japan, and how these changes reflect contemporary society and the burden new names--which are often said to be difficult to read--may present to others. In a country-wide study of naming patterns, it was found that new, difficult to read names are indeed increasing across Japan. However, analysis of the characteristics of the names shows that only a small percentage of names used the kinds of readings often criticized in the media such as non-established (ateji) reading; rather, the majority were based upon regular, established kanji readings. Further studies on the response to new names in the media and how parents choose names showed that names are often seen as a reflection of changing family relationships and understandings of individuality. Thus, criticism of new names can be interpreted as being not caused by the difficulty of the names, but rather because they are seen as symbols of changing values.

研究分野：社会言語学

キーワード：命名学　名前　漢字　社会学　社会言語学

１．研究開始当初の背景

近年において、これまで見られてこなかった、まったく新しい類の名前が、急増していることが幅広く指摘されている（小林，2009；佐藤，2007；徳田，2004 等）。名付けにおけるこの変化は学術の分野のみならず、テレビや新聞、各種のメディアによって取り上げられており、注目を浴びる現象となっている。しかし、その注目は、新しい現象だからだけではなく、近年の名前が危機的と見られているからである。

その危機感は、以前の名付けにおける流行と比較して新しい名前が読みにくいという特徴があるが故である（牧野，2012；佐藤，2007 等）。近年の名前には当て字的なものや、従来の認められている音訓読みを調整した読みを用いることか多いと指摘されている（佐藤，2007；徳田，2004；山西・大泉・西原・福本，2016 等）。その結果、通常の義務教育や社会活動で身に付けられる漢字知識だけで名前の読みが導かれず、こういった新しい名前の読みがほとんど予測不可能だと予想できる。結果的に、新しい名前に出逢う人にとっては、こうした読みにくい名前が負担となり、問題視されている（牧野，2012；佐藤，2007 等）。

２．研究の目的

こうして、新しい名前が変わっているものとして批判されるようになったが、日本語の名付け研究に必要なデータが確保しにくいため（久山，2012）、変わっているとされている名前が実際にどれほど一般化しているのか、またそれらが果たして本当に読みにくいのかを検討したものがなかった。さらに、社会的背景としてなぜこうした名前が増加しているのか、まだ十分に検討されてこなかった。

上記の背景を踏まえ、本研究においては、具体的に（１）名付け研究に必要なデータの確保と開発を進めるとともに、（２）近年の名前にはいかなる特徴があるのか、（３）新しい名前がいかなる社会的背景において出現し、普及してきたのか、（４）近年の新しい名前が、果たして言われているように社会的な負担が重いのか、またその評価がいかなるものなのかを明らかにする。

３．研究の方法

（１）名付け研究に必要なデータの確保と開発：名付けの研究に用いられる名前のデータベースを作成すべく、有効な方法として佐藤（2007）によって指摘された広報誌の活用を検討した。全国の市町村の過半数となる 1,020 市町村の広報誌を対象に、自治体で出生した子どもを、コミュニティーに紹介するコラム（以降、「子ども紹介コラム」）の有無を確認した上、あった場合、子ども紹介コラムでは、子どもの名前に関する情報（性別、読み方等）が明記されているのかを調査した。

（２）近年の名前の特徴の分析：近年の名付け習慣を把握すべく、実際に子どもにあげられた名前のデータベースを収集した。具体的に（１）の結果を活用し、全国からの各地方から 1 市町村ずつ（合計 12 市町村）を対象として選別し、5 年間分（2012 年～2016 年）の子ども紹介コラムにおける名前に関する情報を抽出した。

抽出後、漢字と音の関係に基づき、音と訓の他に、訓と音読みを混ぜた重箱型、従来の読みを工夫した読み、従来の読みとは全く異なる当て字読みを含めているのかを確認し、分類を勧めた。この結果を活かし、新しい名前の全国的な分布および子どもの性別による名付け習慣における差を確認した。

（３）家族の関係作りと近年の名付け習慣の関係：某村の広報誌より、子どもの名前の由来というメッセージ欄（2004 年度～2016 年度の 12 年間分）を抽出し、親が、名付けの際に何を重視したのかを調査した。具体的に、名付ける行為が家族の関係作りにどう貢献しているのかを確認すべく、１．誰が名付けに参加したのか、２．コラムに紹介された子どもとその兄弟、親との名前上の共通点（同一漢字の使用、類似した響き等）、の２点を確認した。１．に関しては、形態素解析を用い、メッセージの分析を実施した。２．に関しては、実際の名前の要素と構成を分析した。

（４）新しい名前の社会的負担と評価：読みにくいとされている名前が社会的にどう受け止められているのかを究明すべく、下記の 3 点を中心に研究を発展させた。

第一に、新しい名前に対する意識がいつ普及するようになったのかを、メディアにおける記事等を追跡することで検討した。

第二に、新しい名前に対する批判のあり方を明らかにすることを目的に新しい名前に関する新聞記事やインターネット掲示板への投稿のディスコース分析を試みた。

第三に、日本の歴史的名付けや新しい名前の読みやすさを考慮した上、その批判の適切性も考察した。ことにメディアにおける批判は誰の立場から行われているのかに着目することを通じ、そういった批判が、名付けにおける当事者（名付けられる人、名付ける人）の立場を十分に反映しているのかを検討した。

４．研究成果

（１）名付け研究に必要なデータの確保と開発：広報誌の調査の結果、対象の広報誌の約半数に名前に関する情報を明記している子ども紹介コラムが連載されていることが明らかになった。また、子ども紹介のコラムのほとんどが、親の名前に関する情報を明記していること、また市町村における死亡告知のコラムも多かったことより、世代間の名付け

習慣に用いるのに有効であることが確認された（表１）。

名付けに用いられるコラムの有無	紙数	人口 最低	人口 最高	人口 M	人口 SD
ある	514	632	543,866	40,192.07	65,359.27
情報が削除	19	4,148	57,626	19,253.63	15,193.83
なし	487	297	13,142,640	262,441.33	1,014,682.49

表１：全国の広報誌における名付けに用いられるコラムの有無と該当する市町村の人口（論文③より引用）

また、この結果を（２）の市町村選抜にも活用し、その発展を通じ、名付け研究における資料としての可能性を証明してきた。

（２）近年の名前の特徴の分析：得られた 2,627 個の名前（男性：1,408 個、女性：1,219 個）のうち、約 60%が、読みが不透明（音と訓を混ぜる重箱型、当て字的なもの、元の読みを工夫したもの）であり、読みにくい名前が一般化していることが確認された。また、地域によって読みにくい名前が多いのかも検証されたが、有意な差が見られず、都市部・町村部関係なく、全国的な傾向であることが確認できた。

一方、男性と女性とでは読みにくい名前がどう頻度で見られるのかを検証した結果、女性の名前の 68%が読みにくいと思われるものに対し、男性の読みにくい名前が 52%に留まった。親世代の名前（父親の名前：2,218 個、母親の名前：2,264 個）との比較をした結果として、近年の子どもの名前は、性別関係なく上の世代のものとは重複することが少ないことが明らかになったが、女性の名前の方が、読みにくいということより、近年の名付け習慣における変化はことに女性の名前に該当する（表２）。

性別		より不透明 個数	より不透明 延べ数	より不透明 出現率	より透明 個数	より透明 延べ数	より透明 出現率	仮名のみ使用 個数	仮名のみ使用 延べ数	仮名のみ使用 出現率
女性	全名前	662	778	1.18	263	365	1.39	56	76	1.36
	女性のみ	650	756	1.16	247	324	1.31	56	76	1.36
男性	全名前	633	725	1.15	566	680	1.2	3	3	1
	男性のみ	621	707	1.14	550	643	1.17	3	3	1
合計		1,283	1,503	1.17	813	1,045	1.29	59	79	1.34
中性的な名前	女性		22	1.83		41	2.56			
	男性	12	18	1.5	16	37	2.31	-	-	-
	合計		40	3.33		78	4.88			

備考　全名前：その性別に用いられた全個数、女性のみ：女性の名前のみとして用いられた名前、男性のみ：男性の名前としてのみ用いられた名前

表２：読みにくいと予想できる不透明な名前の性別出現率

（３）家族の関係作りと近年の名付け習慣の関係：重複のものを 4 通除き、全部で 281 通のメッセージが得られた。子どもの名前情報として、全 285 人の情報が対象とされた（男子：139 人、女子：146 人）。名付けをした人を明記しなかったメッセージが大半を占めたが、付けた人物を明記した 103 通の分析で、父・母を個別に指名したものがそれぞれ 64 通、43 通となった。

他の世代に関しては、子ども自身の兄妹を指名したものが 13 通となったのに対し、子ども自身の祖父母を指名したものが 5 通に留まった。このことより、名付けは主に核家族で行われていることが明確になったが、一方で、兄妹の参加が比較的頻繁に見られたことより、兄妹の絆を深めるために機能していると解釈できる（表３）。

子どもと親、また兄妹同士の名前上の共通点を検討した結果、子どもと親の名前に用いられる字数が同一であることが多かったが、漢字そのものになると、共通の字を用いた親子がほとんどいなかった（合計 14 組）。兄妹は全部で 76 組（167 人）だったが、共通の字を用いる兄妹が 13 組で、共通の字を用いる親子より頻繁に見られた。この結果から、名付け行為への参加と同様に、兄妹同士の関係が重視される傾向が強いことが読み取れる。

子どもとの関係		メッセージ 通	付けた人	由来
			103	65
親戚	核家族	両親	18	3
		母	43	5
		父	64	11
		姉	9	23
		兄	4	14
		兄弟		4
	家族一般	祖母	1	
		祖父	4	7
		両家		1
		家族	4	1
家族にとっての大事な人				3
有名人･登場人物				3
合計			147	75

表３：兄妹の名前上の共通点（論文⑤より）

（４）新しい名前の社会的負担と評価：新しい名前の社会的背景を把握すべく、本研究では第一に新聞記事やインターネット検索の傾向を分析したが、その結果、「読みにくい名前」に対する意識が高まったのが、2007 年頃だったことが分かった。

第二に、図１における検索ピーク、つまり読みにくい名前が注目を浴びた時期と関連する記事の分析により、新しい名前の評価基準は主に名付け行為にかかわらない、新しい名前に出合う第三者の目線から行われている。名付け行為にかかわる当事者と比べ、名前の由来や家族の背景等、情報が不足しているため、その批判が名前を合理性（読みやすさ等）で評価することが多い。しかし、当事者には

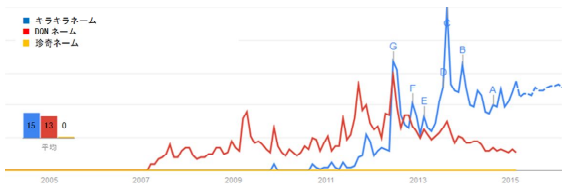

図１：キラキラネーム・DQN ネーム・珍奇ネームの標準化された歴史的検索件数（2004 年～2015 年；Google トレンドより調整。論文⑪より引用。）

第三に、明治時代以降の名付け習慣のあり方と変遷に焦点を当てることにより、そもそも日本の名前には思われているほどの安定性がなかったことを指摘した。伝統的とされてきた名前（例：「子」の付く女性名）の多くが、20 世紀に入ってから普及し出したが、

20 世紀の半ばになりもうすでに減少傾向にあった。つまり、名前が急に変わったよりも、そもそも常に変化していたで、それが加速したように見えるだけである。結果的に、近年の名前が負担に見えるのが、当事者目線と歴史的な意識が欠けていることが所以で、今日でいう「新しい名前」の持ち主（子ども）も成人したときでは、むしろ一般的なものとなっている可能性がある。

＜引用文献＞

久山健太（2012）．S. Lieberson の個人名研究と日本における発展可能性　年報人間科学，（33），1–14.

佐藤稔（2007）．読みにくい名前はなぜ増えたか　吉川弘文館

小林康正（2009）．名づけの世相史―「個性的な名前」をフィールドワーク　風響社

山西良典・大泉順平・西原陽子・福本淳一（2016）．人名の言語的特徴の分析に基づくキラキラネーム判定　日本感性工学会論文誌　*15*（1），31–37.

徳田克己（2004）．名づけの心理 2：読みにくい名前の分析　日本教育心理学会総会発表論文集，（46），623.

牧野恭仁雄（2012）．子供の名前が危ない　ベストセラーズ

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１２件）

① Unser-Schutz, Giancarla. (In press). How to fit in: Naming strategies amongst foreign residents of Japan. *Japan Studies Review*. ＊査読有

② Unser-Schutz, Giancarla.（2018）. 電子掲示板における「常識」への訴えの役割―正当化ストラテジーと「常識」の関係―　立正大学心理学研究所紀要, *16*, 23-36.

③ Unser-Schutz, Giancarla.（2018）. 資料として日本の名付けに関する研究に広報誌を用いる可能性について　立正大学心理学研究年報, *9*, 23-34.

④ Unser-Schutz, Giancarla.（2017）. 日本の名付け習慣における変遷の全国的分布　立正大学心理学研究所紀要, *15*, 67-78. http://hdl.handle.net/11266/5951

⑤ Unser-Schutz, Giancarla.（2017）. 名前に鑑みる家族関係：名前の由来に関する一考察　立正大学心理学研究年報, *8*, 39-50. http://hdl.handle.net/11266/5958

⑥ Unser-Schutz, Giancarla. (2016). Evaluating contradictory hypotheses on the effects of regional differences in the selection of novel naming patterns in Japan. *Orientaliska Studier*, (147), 55-76. ＊査読有 https://orientaliskastudier.se/documents/03_Unser-Schutz_55_76.pdf

⑦ Unser-Schutz, Giancarla. (2016). Naming names: Talking about new Japanese naming practices. *electronic journal of contemporary japanese studies*, 16, np. ＊査読有 http://www.japanesestudies.org.uk/ejcjs/vol16/iss3/unser-schutz.html

⑧ Unser-Schutz, Giancarla. (2016). Changing naming practices in Japan and the United States: Similar values, differing social impacts? *The International Association for Japan Studies Newsletter*, 12, 41-47. http://www.iajs.net/IAJS_Newsletter12_max.pdf

⑨ Unser-Schutz, Giancarla.（2016）. 現代日本における名付け事情とその変遷：男性名と女性名の変化に着目して　立正大学心理学研究所紀要, *14*, 89-99. http://hdl.handle.net/11266/5770

⑩ Unser-Schutz, Giancarla. (2017). ‘Don't call my name *kirakira*!’: On the evaluation and discourse surrounding recent Japanese names. *The International Association for Japan Studies Newsletter*, 11, 42-47 http://www.iajs.net/IAJS_Newsletter11.pdf

⑪ Unser-Schutz, Giancarla.（2015）. キラキラネームといわないで! ― 新しい名前に対する評価とその現象に取り巻く言説　立正大学心理学研究所紀要, *13*, 35-48. http://hdl.handle.net/11266/5587

⑫ Unser-Schutz, Giancarla. (2014). The use and non-use of Japanese names by non-Japanese. *Names*, 62, 202-213. ＊査読有 https://doi.org/10.1179/0027773814Z.00000000086

〔学会発表〕（計１６件）

① Unser-Schutz, Giancarla. (2018/1). “I’m not forcing my values on them, am I?”: Negotiating societal changes on a Japanese internet advice forum. Honolulu (Hyatt Hotel): Japan Studies Association.

② Unser-Schutz, Giancarla.（2017/12）. インターネット掲示板における「常識」の正当化ストラテジー　京都府（京都工芸繊維大学）日本語用論学会

③ Unser-Schutz, Giancarla.（2017/6）.「常識と非常識は誰が決めるの？」―相談における「非常識」確認ストラテジー　京都府（京都女

子大学）言語科学会

④ Unser-Schutz, Giancarla.（2016/12）. やめとけ！：マンガにおける独話に見られる命令表現の対話性　下関市（下関市立大学）日本語用論学会

⑤ Unser-Schutz, Giancarla. (2016/8). On the effect of regional differences in the selection of unique names in Japan. Stockholm (Stockholm University): Nordic Association of Japanese and Korean Studies.

⑥ Unser-Schutz, Giancarla. (2016/5). Changing trends in Japanese women's names: Increased diversity, increased backlash? Hong Kong (Hong Kong City University): International Gender and Language Association.

⑦ Unser-Schutz, Giancarla. (2016/4). Negotiating common sense: The construction of shared values in online communities. Sendai (Tohoku University): Anthropology of Japan in Japan.

⑧ Unser-Schutz, Giancarla. (2016/1). Japanese society in transition: Observations from recent naming practices. Honolulu (Hyatt Hotel): Japan Studies Association.

⑨ Unser-Schutz, Giancarla. (2015/12). Changing naming practices in Japan and the United States: Similar values, differing social impacts? Tokyo (Toyo University): International Association for Japan Studies.

⑩ Unser-Schutz, Giancarla. (2015/11). My mother rejected the names I selected for my child!: Who gets to be involved in naming children in contemporary Japan. Tenri (Tenri University): Anthropology of Japan in Japan

⑪ Unser-Schutz, Giancarla. (2015/4). Uniqueness, functionality and the public: Japanese parents' reasons for selecting new unusual names. Tokyo (Seijo University): Anthropology of Japan in Japan.

⑫ Unser-Schutz, Giancarla. (2014/12). 'Don't call my name *kirakira*!': On the evaluation and discourse surrounding recent Japanese names. Kyoto (Kyoto Women's University): International Association for Japan Studies

⑬ Unser-Schutz, Giancarla. (2014/11). Recent Japanese naming practices and the role of important others in selecting names. Nagoya (Nanzan University): Anthropology of Japan in Japan

⑭ Unser-Schutz, Giancarla. (2014/5). New Japanese naming practices: Reflecting changes in ideals for children. Chiba (Makuhari Messe): International Union of Anthropological and Ethnological Sciences.

⑮ Unser-Schutz, Giancarla. (2014/1). Selecting data on names: City newsletters as a resource for Japanese names research. Minneapolis (Hilton Hotel): American Name Society.

⑯ Unser-Schutz, Giancarla. (2013/6). What can I call you? Naming strategies amongst foreigners in Japan. Tokyo (J.F. Oberlin University): Asian Studies Japan Conference.

〔図書〕（計1件）

① Unser-Schutz, Giancarla. (In press). Persuasion through commonality: Legitimizing actions through discourse on common sense in a Japanese advice forum. In Ross, A.S. & Rivers, D.J. (Eds.), *Discourse of (De)Legitimization: Participatory Cultures in Digital Contexts*. London: Routledge.

６．研究組織

(1)**研究代表者**

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ
（UNSER-SCHUTZ, Giancarla）
立正大学心理学部　准教授
研究者番号：70632595